

「グレイリング——殺人は必ず露見する」

ウィリアム・ギルモア・シムズ作

中村正廣 訳

1

今日この頃は興味索然たる世の中になったものである。ひたすら怪談を追い求めることなどとうてい無理なご時世だ。唯物主義者は勝手次第に振舞い、八歳の悪太郎まで祖母の意見にきちんと敬意を払いこれに従うといったことはせず、自分の考えを頑強に擁護する始末だ。連中が信頼を置く「学問」はと言えば、霊物理学以外のものなら何でもよい。「ファウスト」も「バークレイの老婦人」もただ連中の嘲笑を買うだけで、エンダーの魔女²にしてもかなうことなら疑いの目で笑い飛ばしてみたいのだ。近代的な論理という鎧がことごとく連中の後押しをしている。信仰は意志の問題として捉えることはできないと時折認めることはあっても、それでも盲信の類は皆退けてしまう。自然科学という冷血の悪霊が他のすべての悪霊に取って代わってしまったのだ。正犯の命だけは勘弁して見逃すことはあったとしても無数の悪魔を追い払ったことだけは確かである。しかし、この悪霊の介入の恩恵に私たちが浴しているかどうかは別問題だ。幻影に対する人間の信仰をかき乱すことで、法律に代わり多くの人間が邪なことをせぬよう守ってくれたはずの健全で道德的な規制を私たちは幾らか失ってしまったのではないかと私など氣遣うのだが、これにはそれなりの理由があるのである。

しかしながら、およそ浪漫的なものに関する限り、私たちはますます甚大なる悪影響を受けつつある。今時の物語作家は現実的なもの、実的なものを売りさばくという断固たる決意を固めており、細部が通俗的でかつ証明可能なものでなければ、意を決して問題に取り掛かったりはしない。実際、以上の目的を視野に入れた上で、有罪判決の決め手となった証拠を都合よく使うために既に有罪が確定した重罪犯人の中から主題を取り上げているのが当節の作家の現状なのだ。自然の姿と真実を頑固に描いていることをさらに決定的に証明しようとする彼らは、自然を赤裸々な状態で描くだけではない。自然が流水となって流れ出す多くの泉を探し当てる機会すらも奪ってしまうのである。現代のこのような趣向の粗野ぶりは、まさしく古来の誤信に見られその誤信を威厳という次元にまで昇華した尊敬の念があまりにも大きく欠落していることから生じているものもあると懸念を寄せざるを得ない。驚異的なものを愛する心は造形芸術のいずれかを愛し奨励するすべての人々にあると私には思われる。畢竟するに、詩人であれ画家であれ彫刻家であれ、はたまたロマンス作家であれ、目に見えぬ世界の驚異への信仰に何らかの強い傾向、少なくとも強い好みを持たなかった人間がこれまで存在したはずもないのである。紛れもなく、優れた詩人や画家たち、つまり創造し創案する人々は、その創作において迷信的なところを強く見せているはずなのだ。ともあれ、話が本筋から逸れてしまったので、本題に戻ることにしよう。

亡霊を見たり亡霊の噂を耳にすることができた時代は随分昔の話であり、当節において天の配剤というものが物珍しさの効果を生むかもしれないので、少年時代私が一度ならず年老いた親戚の口から直接聞いた物語をこれから語りたいと思う。当時私はこの親戚の言葉ひとつひとつをしつかりと信じ込んでしまったのだが、それは恐らく彼女自身が自分の言葉ひとつひとつを信じていることを私に納得させたからという単純な理由によるのかもしれない。私の祖母は、革命中カロライナで最も頻繁に戦闘が繰り返された地域に居を構えていた老

婦人であつた。祖母は目の当たりに突きつけられた無数の残虐行為を幸運にも切り抜けることができた。記憶力が確かで鋭敏な観察者であつた祖母は、その騒がしい時勢の伝説を山ほど貯め込んでいて、これが幾たび私を喜ばせ長夜の眠りを妨げたことか知れない。これから私が語る物語はそのうちのひとつである。祖母自身これを心から信じていただけでなく、第三者が知りうる類の状況に通じていた同時代の人々が誰彼なく祖母の話を通じていたことを私がここで披瀝すれば、この伝説を私が嚴肅に繰り返して語つたとしても読者の皆さんがさほど驚きを覚えることもないだらう。

独立革命が終結してまだ間もない頃のことである。英軍はこの国を既に後に後にしていたが、平和は訪れても安らぎが戻つたわけではなかつた。この国は七年も続いた闘争の間激情を刺激し働かせてきたため、その激情に当然付随するはずの騒乱状態に未だ社会はあり、未だにその激情は鎮まることはなかつたのである。州内には無為徒食の徒や山師や悪逆の徒や犯罪者がはびこつていた。除隊となつた飲まず食わずで無鉄砲な兵士の連中が公道を占拠し、隠れ家から姿を現した不逞の輩が憎しみと同時に恐怖を抱きながら開拓地の辺りをこそそこそと動き回る有様であつた。愛国の志士たちは王黨員に対する裁判を要求していきり立つて騒ぎ、時には自らの判断で裁判に先手を打つこともあつた。一方、王黨員たち、つまり、確かな証拠が揃いすぎて否定も言い抜けもできない者たちは、新たな闘争を始めるべく鎧甲を身にまとつた。国がこのような状況にあつたから、生命と財産の安全確保に必要な手段の多くが欠落していたことは容易に想像できよう。武器を携帯し、ちよつとしたことですぐに武器をちらつかせながら旅することは誰もがやることであつた。護衛を雇う余裕のある者が、たとえ短い旅であつても護衛もつけずに危険を覚悟のうえで旅に出ることなどほとんどなかつた。

国ががような状況にあつた頃、「ナインティ・シックス」³地区の外れの辺りにグレイリングという名の家族が住んでいたことを、私は祖母から聞いた。家長のグレイリング老人は既に亡くなつていた。ビュフォードの

虐殺⁴で戦死したのである。妻は高潔な人柄で、さほど年輩の女性ではなく、子供は一人息子のジェイムズとわずかに五歳の幼い娘ルーシーの二人だけであった。父親が戦死したときジェイムズはまだ十四歳であったが、この事件で彼は一人前の男になった。母親の弟のジョエル・スパークマンと一緒にライフルを持って戦地へ赴き、ピケンズ⁵の旅団に加わったのである。ここで彼はどんな優れた兵士にも負けぬ立派な軍人となった。彼は恐怖というものを全く感じなかった。最初に突撃していくのはいつもジェイムズであった。そして彼のライフルはたつぷり百ヤードは離れた敵兵のボタンをいつも狙うことができた。英軍と王党派からなる連合軍と何度か戦ったこともあり、戦争終結の直前にピケンズがチェロキー族から土地を奪ったときは、この部族とのあの有名な小競り合いを演じてみせた。恐怖を知らず、また戦闘が続いているときいつ殺すのをやめればいいのかわからないジェイムズであったが、しかし彼ほど照れ屋の少年はいなかった。加えて情け深いたちで、彼が戦闘中にやった残忍な所業を耳にした私たちは自分の耳を疑ってしまうこともあった。しかしどれほど彼が照れを見せようと、これらの行為は全くの嘘偽りのない事実であった。

さて、戦争が終わるとジョエル・スパークマンは同居していた妹のグレイリングに低地地方に引越した方がいいと勧めた。どのような事情があったのか、またそこで二人が何を始めるつもりだったのかはわからない。二人にはほとんど財産らしい財産もなかったが、スパークマンはどんな仕事でもやってのける物知りであった。おまけに彼は独り身であって、妹ばかりか妹の子供たちも我が子のように愛していたから、彼が望むところどこへでも妹がついていくのも当然のことであった。ジェイムズにしてもじっとしていられないたちで、何度も戦争を経験したためになおさらその傾向を強めており、頭の中は旅のことでいっぱいであった。かくして、四月のある朝、春の日差しの中彼らの馬車はその都市を目指して出発した。彼らの二頭立ての馬車は小さく、ワサモ⁶の辺りから市場へ鶏や果物を運ぶのに現在使われている馬車程度の大きさのものであった。御

者はクリタスという名の黒人で、馬車の中にはグレイリング夫人とルーシーが乗っていた。馬の鞍を愛好するジェイムズと叔父がそのような車に閉じこもるはずもなく、二人は敵から奪い取った立派な馬に乗って進んでいた。ジェイムズが跨っているのは自慢の鞍で、カウペンズの戦いでタールトン¹⁰直下の竜騎兵の一人を馬から投げ飛ばした後に奪った鞍であった。折から道路の状態は極端に悪かった。三月の大雨に幾度となく見舞われた道路は至る所で寸断され、「ナインティ・シックス」の山々の赤粘土の小峡谷はえぐり取られており、一日に何度も全員で力を合わせ泥沼から馬車の車輪を引き上げねばならなかった。このため彼らの旅は非常にゆっくりとしたものとなり、一日にどんなに進んでもせいぜい十五マイルぐらいであったと思われる。旅が遅々として進まぬのは、十分な警戒が必要で、絶えず道路の前方と後方の敵を見張っていたからでもあった。戦争のとき斥候がよくやるように、ジェイムズとその叔父は交互に一人が前方を馬で進み、もう一人はいつも馬車から離れることはなかった。このような旅を二日間続けても、彼らを難儀させ慌てさせる場面に遭遇することはなかった。街道にはほとんど人影もなく、彼らが出会った人々は彼らを徹底して避けているようだったが、彼らも恐らく見知らぬ者には同じように振る舞ったと思われる。しかし二日目の暮れ方になって、焚き付け用の木を割り、やかんやフライパンを取り出して野営の準備に取り掛っている彼らのもとへ一人の男が馬でやって来て、彼らの野営に飛び入りで加わることとなった。背の低いずんぐり男で、年の頃は四十から五十、殊の外丈夫で元気のいい素晴らしい黒い馬に乗っているが、身につけている服は非常に粗末な普段着であった。口数は少ないが非常に丁寧な物言いだ。ただそのわずかな話からすると、どうもあまり教育を受けていない教養のない人物らしい。どうか野営地の一員となる許可をいただきたいと彼は言い、物腰は非常に丁寧で遠慮がちなところすらあった。しかし顔にはどこことなく暗くむつりしたところがあって、薄い灰色の目はそれわして落ち着かず、鼻はつんと上を向いていて真っ赤な色をしている。額は極端に広く、眉毛はもじゃ

もじやのゲジゲジ眉で、その眉と髪の毛に白髪が勝手気ままに入り込み黒髪と混ざっている。男の容貌が好きになれずにいたグレイリング夫人が嫌な思いを息子にそつと打ち明けると、腕力では誰にも負けないと思つてゐるジェイムズは、すかさずこう答えた、

「母さん、そんなことどうでもいいじゃないか。客人に駄目だと言つて追い払う訳にもいかんだろう。それにあいつが何か悪いことを企んでいたとしてもこっちは二人だぞ」

男は武器は持つていなかった。少なくともそのとき目に見える武器は一つもなく、それに高ぶつた振る舞いは微塵もなかったから、男が最初に現れたときに彼らが抱いた偏見は、男がそこにいた間は消えてなくなることはなかったものの、少なくとも増大することはなかった。男は無口で無駄口は一切たたかず、女性も含め一行の誰とも目を合わせようとはしなかった。最初男がやって来たときに生じた敵対的な印象がグレイリング夫人の心に頑固として定着することになったのも恐らくこのためだったのかもしれない。しばらくするとかりそめの野営地は社交的であると同時に戦闘的な状態に置かれた。馬車は少し森の中へ、街道から外れたところへ移された。馬を盗まれないよう見張る必要があり、手ばかりから生じる万一の事態に備えて馬を迂闊にも盗まれることがないようにするため、馬は馬車の後ろに繋がれた。馬車の底の藁に隠された予備の銃にはしっかりと銃弾が装填された。まもなくすると、馬車と街道の間の人目を引くところで焚き火が激しく、しかし陽気に燃えていた。貴婦人然としたグレイリング夫人は幼い少女のルーシーの手伝いをもらいながら、すぐにフライパンを火に掛け、家を出るとき準備したベーコンの後足の部分を薄く切った。さて、ジェイムズ・グレイリングは野営地の辺りの森を一マイルか二マイルほど巡回し、叔父のジョエル・スパークマンは見知らぬ男と膝を突き合わせていたが、ジョエルの顔は、もしすべての心配の欠在が人間の至福の絶頂の本質であるとするなら、まさに人間の幸せというものを得心の行くまで嘯みしめているといった風情であつた。しかしジョエルは一見

無頓着な人間に見えるが決してそうではなかった。老練な兵士がよくやるように彼はただ心の内とは正反對の印象を与えていただけであり、自信と勇気を必要以上に見せることで内心及び腰になっているのを隠していたのである。彼は妹と同じく最初からこの見知らぬ男が好きになれなかった。穴の開くほど相手を見つめた。当時の危険と疑惑の時代にあつて、この行動は客に対する相応の礼儀と決して矛盾することはなく、こうして彼は相手がいかがいしい男であるという結論にすぐに達したのであつた。

「この辺りじゃ見かけない顔だが、あんたスコットランド人だろう」ジョエルは突然両足を引き寄せ、やまうずらの群に襲いかかる鷹のような目つきで相手の方へ体を前に傾けながら言つた。これまでこれに気づかずにいたのも不思議なことであつた。男の方言丸出しの物言いは押し隠すことはできないものであつたのに、ジョエルは精神の旅においてはゆつくりと歩みわずかに前進するだけであつた。男ははつきり躊躇の色を見せながらそつたと答えた。

「そうかい、でもあんたが俺たちの敵じゃなくて俺たちに味方して戦つたとは意外だな」とジョエル・スパークマンは答えた。「スコットランド人たちは何が起つてもトリー黨員に味方して俺たちと真つ向から戦鬪を交えてきたもんな、これをやらんスコットランド人はほんのわずかだったし、俺の知り合いにはそんな奴は一人もおらん。恐らくあんたを除いてはな。『クロスクリーク開拓地』¹²には俺たちホイッグ黨員もほんとにひどく悩まされたもんだ。あそこはほんとにたちの悪いならず者の連中の巢窟だったぜ。俺はこう願っているんだ、思いたいんだ、あんたあそこ出身じゃないよな」

「いや、それは違う」ともう一人は言つた、「とんでもない。俺は反對の方角の方からやつて来た。北にあるダンカン開拓地¹²の出だ」

「あんたが言うその方角の開拓地のことは噂に聞いたことがあるが、その人間が俺たちの味方になつて戦

ったという話は聞いたことがねえな。あんたどの將軍の下で戦った？カロライナのどの將軍だ？」

「ゲイツ將軍¹³が敗北を喫したとき俺はガム湿原¹⁴にいた」もう一人はまだためらいがちに答えた。

「そうかい、俺はあそこにおらんでほんとによかったぜ。あの日逃げ出した二本足の動物の中にサムター¹⁵やピケンズやマリオン¹⁶の部下が数人でも混じっておれば、事態はあんな風に悪くならんですんだだろうがな。連隊の中には一度もライフルをぶつ放さずに逃げた部隊があるという話をこの耳で聞いたぜ。ところで、あんた、その連中の一人じゃなかっただろうな」

「勿論だ」もう一人の答えは先ほどより少し早く返ってきた。

「男でも命が惜しいから銃弾は避けるさ、銃剣が来る前にすつとんで逃げることもある。俺はだからそんなことを責めたりはせん。何と言ったって、生きている男の方が死んだ男よりもいいに決まっているし、そんな可能性もあるかもしれないねえからな。しかし敵に一発もぶつ放すこともせずに逃げ出すのは臆病以外の何物でもねえ。これは決まっているよな、あんた」

大いに力説されたこの考えはスコットランド人の快諾を得たが、ジョエル・スバークマンは自分の能弁さに魅せられて質問の目標から脇道に逸れることはなかった。

「しかしまだ話してくれてねえな」と彼は続けた、「あんたの上官のカロライナの將軍は誰だった？ゲイツはヴァージニイ¹⁷からやって来たんだが、しかし彼はここにはほんの少しの間しかおらんかった。あんたがキヤムデン¹⁸でとんづらしたとは思わねえし、あんたもう一度軍に入ってグリーン¹⁹の軍に加わったんだろう。どうだ、事情はこんな具合か」

男は明らかに気乗りしない素振りを見せながらもこれに同意を与えた。

「なら俺たち、時たま一緒に同じ小競り合いに加わっていたかもしれんぞ。俺はカウペンズとナインティ・

シックスの戦いに参加し、その他いろんなところで実戦の経験を積んだ。ふざけているよりも戦っているときの方が多かったぜ。あんたもナインティ・シックスの戦いに参加していたに違えねえと思うんだ、もしあんたがモーガン²⁰と一緒にだったんならカウペンズの戦いでも戦ったはずだ」

これらの質問に、答えたくないという男の素振りがますます大きくなっているように見えた。これはスパークマンが事件後もはっきり覚えていたことだが、男はガム湿原でのゲイツの敗北の場合と同じようにこの件についてどちらの側について戦ったかは言わなかった。それでもナインティ・シックスにいたことは認めた。客が返答を渋るのを目の当たりにし、ますます頑なになるのに気づいたジョエルは、客を悩ますのは控えたが、更に相手の動作を嚴重に警戒する覚悟を心の中で固めた。彼の取り調べはひとつの質問で終わりを告げたが、それは南部と西部の率直な地方では往々にして最初に出されるものである。

「で、あんたの名前は一体何というんだ」

「マクナブ²¹」すぐに答えは返ってきた、「サンディ・マクナブだ」

「よろしい、マクナブさん、妹が俺たちの夕食を準備してくれたようだ。トウモロコシパンとベーコンを食べるとするか」

スパークマンは話しながら立ち上がり、グレイリング夫人がごちそうを並べている馬車の側の場所へ客を案内した。「街道はすぐそこだが、こうすれば大きな危険に晒されることはない。それにジム・グレイリングが俺たちのために見張りをしてくれているしな。あいつにはこの国の斥候の誰と比べても負けないしっかりとした目がついとるし、ライフルも持たせてある。一度あいつがライフルを撃つのを見たら、その銃声を耳にするだけで元気が出るはずだ、あいつが照準を定めた目標があんたの心臓でなければな。あいつはそりゃてーした銃の名手だな、まるで神様がくださった才能であるかのようにいつもぶっ放す手はずを整えているんだぜ」

「彼を待つてから食事にするのか」マクナブは心配そうに尋ねた。

「とんでもないぜ、あんた」スパークマンは答えた。「俺たちが食事を取っている間あいつは見張りを続ける、それから俺と選交代だ。さあ食べてくれ、これから先のことは心配しないでもいい」

スパークマンがトウモロコシパンを割ったちようどそのとき、遠くの方で口笛の音が聞こえた。

「おい、あいつからの合図らしいぞ」彼は立ち上がりながら叫んだ、「何か見つけたらいい。敵の焚き火を見つけたらいいぞ。あんた、マクナブさんよ、どうやら武器の準備に取り掛かった方がいいようだぜ」こう言いながら、スパークマンは幼いルーシーが既に乗り込んでいる馬車に妹を乗せると、ライフルの火皿をさっと開け、一本の指で火薬をかき混ぜた。一方マクナブはそれまで尻に敷いていたピストルの革袋から銀の紋様を贅沢にちりばめた二丁の大型ピストルを取り出していた。それは大型の長い銃で、明らかに使い込んだ様子であつた。もう一人と比べて、男の仕事は取り立てて注目を引くものではなかつた。男がやったことは習慣から来るものらしく、彼自身ほとんど意識してはいなかつた。自分の装束を見てから何も言わずに銃を側に置き、スパークマンから受け取ったばかりのトウモロコシパンのかけらを再び食べ始めた。そうこうするうちに、ジェイムズ・グレイリングから発せられたと思われる合図の口笛が再び鳴つた。それからしばしの間静寂が続いたが、その間にスパークマンは野営地近辺を巡回した。彼が焚き火のところへ戻ると、ここでもやく馬の蹄の音が聞こえ、グレイリングが鋭く迅速に発した大声に、叔父はすべて事無しということを知つた。若者は馬に乗つた見知らぬ男を連れてすぐに姿を見せた。男が背が高く気品のある顔立ちの若者で、観察力の鋭い目をしており、近づいて来るとき聞こえたその快活で澄んだ声は勝利の後のトランペットの音のように陽気に響きわたつた。ジェイムズ・グレイリングはこの新しい客の側を徒歩でやって来たが、ジェイムズが近づいてきてはつきり事の真相を告げぬうちから、ジェイムズの気ままでおしゃべりでさえするような話しぶりを耳にした

叔父は、彼が友人が少なくとも昔の知り合いに思いがけなく出会ったということを知ることができた。

「おい、ジェイムズ、一体誰を連れてきたんだ」スパークマンはライフルの台尻を地面につけながら尋ねた。

「叔父さん、一体誰だと思う？何とあのスペンサー少佐だ、俺たちの少佐だよ」

「まさか、何だって、ほう、確かにライネル・スペンサーだ。これはこれは少佐、こんなところであなたにお会いするなんて誰ひとり思いもしませんぜ。それにほんとに、まるで再び戦争をおっぱじめなくてはならんといったような格好で馬に跨っていらっしやる。それはとにかく、お会いできてうれしいです。こんなうれしいことはない、ほんとに」

「スパークマン、君に会えて私も本当にうれしい」もう一人は馬から降り相手の心のこもった握手に自分の手を任せながら答えた。

「いや、少佐、おっしゃっていただかなくても俺はわかっております。とにかくうまいときにいらっしやった。今ベーコンを揚げているところですし、ほらパンもあります。本式の野営のやり方でしゃがんで精一杯大事にいただきますよう、なにしろ神様が賜物として下さったものですから。少佐、まさか今晚これから馬で旅を続けなさるつもりじゃないでしょうな」

「勿論だ」話しかけられた相手は答えた、「君の焚き火で私のかかとを暖めるのを許してくればの話だが。ところであの馬車におられるのはどなたかな？私の旧友グレイリング夫人かな」

「おっしゃる通りですよ、少佐」夫人は気さくに機敏に馬車から姿を見せ、手を差し伸べながら自分で質問に答えた。

「これはグレイリング夫人、お会いできて本当に嬉しく思います」この新しい客は紳士らしくもの柔らかに、そしてまた昔の隣人らしく心のこもった熱意を見せながら、昔の知り合いと再び一緒にきて本当によかった

と言った。二人の挨拶が終わると、スペンサー少佐は喜んで焚き火の周りの一行に加わったが、ジェイムズ・グレイリングは、少し気が進まない風を見せながらも、夕食の間斥候という大変な仕事に再び取り掛かるために姿を消した。

「ところでこちらはどなたかな？」スペンサーはスコットランド人の暗く険しい顔を見据えながら尋ねた。スパークマンはこれまで自分が知った男の名前と性格について短く小声で答えてから、すぐに次のように正式に二人を紹介した。

「スペンサー少佐、こちらはマクナブさん。少佐、マクナブさんが申しますには彼はスコットランド盟約派の紺色よろしく志操堅固、ゲイツ將軍が『あの忌々しい民兵を連れ戻す』ために懸命に逃走したときキャムデンで戦ったことです。また彼はナインティ・シックスとカウペンズでも戦ったことがあるということです」

スペンサー少佐はスコットランド人を鋭く吟味するように眺めたが、その視線をスコットランド人はとても好きにはなれないようであった。少佐は戦争という話題で話しかけ、相手が関係したと認めた戦闘について幾つか質問したが、立派に幾多の辛苦を切り抜けてきた勇敢な兵士にしては不自然なほどに、相手が自分の正体を明かそうとしない素振りをはつきりと見せたため、軍隊生活で荒つばくもまれながらも繊細な感覚を著しく損なうこともなかった若い士官も当然ながら話を続ける氣力をそがれてしまった。しかし、少佐はマクナブにそれ以上質問することは控えても、彼の目は好奇心と不思議と増大していく関心を見せながら相手のむつつりした顔の表情を観察し続けた。その後、夕食が終わり、ジェイムズ・グレイリングが戻ってきてスパークマンが斥候の勤務についたとき、少佐はこれをスパークマンに説明した。

「スパークマン、あのスコットランド人の顔はどこかで、それもある興味深いときに見かけたという確信は

あるのだが、いつ、どこで、どんな風にしてかはつきり思い出せない。あの顔を見かけた状況は苦しい不愉快な経験と私の心の中で結びついているんだが、一体あれはどこだったんだろうか？」

「どういうわけか俺もあいつの顔つきが気に入らんですよ」とスパークマンは言った、「それに今も昔もずっとホイッグというよりはトリーリーだったと疑いたくなるんですが、しかし今そんなこと言ったって筋違いというもんでしょう。こうして同じ焚き火のところにいるわけですし、一緒にトウモロコシパンを割って食べた仲ですから、昔の嫌な問題を蒸し返して騒ぎを起こすわけにもいかんでしょう」

「そうだな、確かにその通りだ」とスパenserは答えた。「たとえ彼がトリーリーだったことがわかって、昔の喧嘩が原因でまた喧嘩を始めるということがあっちゃいかな。しかし用心と警戒はせねばならんぞ。低湿地の中で敵の行動を見張るという昔の任務を君が忘れていないのがわかって私はうれしいぞ」

「少佐、俺が忘れるとお思いですか」スパークマンは耳を地面につけて耳をすましながら、小声とはいえずを込めて尋ねた。

「少佐、ジェイムズが夕食を終えたようです、あの口笛を使って俺に知らせてるんですよ。これからちょっと戻って今晚どうやって警戒を続けるかあいつに説明してきます」

「スパークマン、君の計画の頭数に私も入れてくれ、今夜は君の仲間の一人だからな」と少佐は言った。

「それは絶対駄目です」答えが返ってきた、「今夜はジェイムズと俺の二人だけのものだ。あなたが俺たちのどちらか一方と一緒にやるんなら、そりゃ話は別ですから、勿論好きなようになさって結構です」

「ジョエル、この問題で言い争うのはなしにしよう」二人で野営地に戻りながら、将校は愛想よく言った。

まもなく野営の手はずは整えられた。スペインサーは焚き火のところで警備に参加したいと再び切り出し、スコットランド人のマクナブも手を貸したいと申し出た。しかしマクナブが申し出たこともあり、スペインサーの申し出は丁重に断る必要があった。スパークマンはすべて自分なりのやり方でやる決意を固めていた。ジェイムズ・グレイリングが一人で巡回している間、スパークマンは灌木を切つて前の指揮官が使うテントのようなものをこしらえた。グレイリング夫人とルーシーは馬車の中で眠った。スコットランド人は無造作に焚き火の前で大の字になった。ジョエル・スパークマンは外套にくるまり、車輪に少し背をもたせるようにして馬車の車体の下にうずくまった。時折起き上がっては燃えさしを何本か火に突っ込み、夜空を見上げ小さな野営地を見回してからねぐらに戻り、落ち着かぬまま何度か仮睡を取った。最初の二時間の見張りが終わり、ジェイムズ・グレイリングは職務から解放された。しかし若者はとても寝る気になれず、火の側に陣取ると、ポケットから平易な文章読本の小本を一冊取り出した。樹脂の多い焚き付け用の木の放つちらちら明滅する明かりを頼りに、七年という歳月を戦争に費やし大事件に心躍らせてきたために青年期に貴重な時間を正しく使うことができなかった分をこのようなぞんざいなやり方で埋め合わせるつもりであった。読み始めたところへ前の指揮官が不意に姿を見せ彼を驚かせた。指揮官も寝付かれず數から外に出てグレイリングのいる焚き火のところにやってきたのである。若者は昔スペンサーお気に入りの部下であった。同郷のよしみもあった上に、ジェイムズの最初の軍事的功績はこの士官の目の前で行われ、その賞賛を得た。二人の間に年齢差はあっても、位の下の者が当然持つはずの敬意の念を少しも減じることなく若者が温かい愛着を抱くのを許容するようなものであった。グレイリングはせいぜい十七歳ぐらいで、スペインサーは恐らく三十四歳、まさに男盛りであった。二人

は火の側に腰をかけ、昔のことを語り合い、若者がよくやるように陽気に気さくにいろいろと報告しあつた。互いに質問し合うことで今回の旅を続ける二人の目的も明らかにした。ジェイムズ・グレイリングの目的は実際のところ彼自身のものとは言い難いものであつた。それは彼の叔父の計画と目的であつて、その中身についてこれまで既に明らかにされてきたことよりもさらに詳しい情報を私たちがここで手に入れても物語の展開に資することはない。しかしそれが何であつたにせよ、二人がさながら兄弟であるかのようにジェイムズたちの目的は聞き手に対して腹藏なくつまびらかにされ、スペンサーは相手と同じく自分の事情を包み隠さず明かしたのである。彼もまたチャールストンに向かう道中にあり、そこから英国に渡る予定であつた。

「一刻も早く町に行きたくてな」と彼は言つた、「数日後に英国に向けて出航する予定のファルマス²²行きの定期船があるんだが、その船に是非とも乗らねばならんのだ」

「少佐、英国へ行かれるのですか」若者は驚いた様子をそのまま見せながら叫んだ。

「その通りだ、ジェイムズ、英国だ。どうした、ジェイムズ、どうしてそんなに驚いた顔をするのか」

「だって少佐」純朴な若者は叫んだ、「少佐が何度も英国軍の中に飛び込んでめつた切りにしたことを俺と同じように連中が知つたら、それだけであいつらヒッコリーの木を見つけ次第少佐を吊し首にしますよ」

「まさかそんなことはあるまい」もう一方は微笑みながら答えた。

「でも少佐、名前は変えるんでしょうね」若者は続けた。

「いや」とスペンサーは答えた、「そのようなことをすれば今回の航海の目的が果たせなくなる。ジェイムズ、実を言うと英国の年老いた親戚がかなりのお金を私に残してくれたのだが、自分がライオネル・スペンサーだと証明できなければその金は私の手には入らないのだ。だから危険がいかにどのものであろうと、本名で通さなくてはならんのだ」

「とにかく少佐にあれこれ言う必要はないでしょうが、連中がホブカーク²³やカウペンズやユートウ²⁴などあちこちの戦場であいつらの部隊にあなたがなさったことをかぎつければ、平時戦時に関係なくすぐにあなたを縛り首にすることは間違いないですよ。しかし、今でもお金持ちの少佐が何故お金を手に入れるためにわざわざ英国くんたりまで行かれるのか俺にはわかりません」

「君が思っているほど私は金持ちではないんだ」答えながら少佐は何気なしに不安げな視線をスコットランド人にちらっと向けたが、スコットランド人は火の反対側でぐっすり眠っているようであった。「いつの時代でも田舎にはお金はほとんどないからな。チャールストンに着いたら自分の旅費も工面しなくてはならんだ。そこまでのお金しか今は持ち合わせがない」

「本当ですか、少佐、とても信じられませんよ。いつもあなたはこの辺りで一番の金持ちだと言っていると思っておりましたからね。でも少佐がそんなにお困りでしたら、しゃばったことをしていると思っていただきたくないですが、ここに一ギニほど余分に持っていますのでどうぞ使って下さい。英国でお金が入ったら返してくればいいですから」

ここで若者は胸の辺りの小さな綿の財布を捜していたが、瞬く間にわずかな中味の入った財布が将校の目の前に現れた。

「いやいや、ジェイムズ」もう一人は気前よく差し出された手向けを押し戻しながら言った、「チャールストンにたどり着くまでの金は十分に手許にあるし、そこに着いたら恐らく商人たちに援助してもらえるはずだ。しかし、君のご厚意には感謝する。ジェイムズ、君は本当にいい奴だ、君のことは忘れんぞ」

二人の会話をこれ以上記す必要はない。騒ぎひとつ起きることなく夜は過ぎていき、次の日の夜明けに一行は出発の準備を始めた。まもなくグレイリング夫人はせわしく朝食の準備に取り掛かった。スペンサー少佐は

朝食が終わるまでそこに残ることに同意したが、スコットランド人は一晩泊めてもらった札を丁寧に述べると、すぐに再び旅を続けた。男が向った方角は一行と同じく下流のようであつたが、しかし彼は自分のルートをはっきり告げることもせず、またスペンサーのルートを知りたい気持ちを素振りに見せることもなかつた。スペンサーは男が前の晩答えるのを嫌がつているように思えた質問を新たに始めるつもりは毛頭なく、男が発するのを静かに見守り、他の者たちと声をそろえて愛想良く「では楽しい旅を」と言つた。男の姿がすっかり見えなくなると、スペンサーはスパークマンに言つた、

「あの男の顔が好きになれたら、いや、どうしても好きになれないということがなかつたら、彼と一緒に旅を続けただが。とてもそんな気にはなれないから、ここに残つて皆さんと一緒に朝食をいただくでしょう」

食事が終わると彼らは出発した。スペンサーは一マイルは一緒に進み、ここで彼もまた暇を告げた。家族が旅するゆっくりとした馬車のペースは威勢のいい騎馬武者には合わなかつたし、それに彼が一行に納得が行くように説明したように、彼はあと二晩で例の都市に着く必要があつた。心から別れを惜しむ気持ちを覚えそれを熱っぽい調子で口にしてから彼らは別れた。自分の好きな将校と別れたこの日ほどジェイムズ・グレイリングは馬車の旅が退屈だと感じたことはなかつた。しかし強靱な心を持ち合わせている若者は決して不平を鳴らすことはなかつた。不満はいつになく彼が見せる沈黙と先へ進もうと勢い込む逸る心に現れただけだつたが、この思いは彼の馬の場合も同じようであつた。こうして一日が過ぎ、その日の終わりに旅人は旅人の一行は日の出から日の入りまでの間に二十マイルほど進んだ。前の晩と同じくこの夜も野営地では警戒を怠ることはなく、翌朝彼らは元気を取り戻して起き上がったが、明るく晴れた気持ちのよい気を引き立てるような夜明けだつた。前日と同じように二十マイル進み、太陽が沈む頃には彼らは露营地のところへ到着し、いつものように安全と夕食の準備に取り掛かつた。彼らが陣取つたのは松の木と雑木のようなオークの木が生い茂つた森のはずれで

あつた。その一部はその地方の方言で「草原」と呼ばれている奥深い低湿地帯に飲み込まれていて、そこに生育しているものはイトスギと月桂樹であつたが、これにツポーラ²⁵、ゴムの木、そして生長の止まつた低い灌木の繁茂した藪、葎が入り交じり、さらに木々の間の隙間を埋めつくし湿原に侵入しようとする人間をこれほど効果的に排除できるものはないと思われる小型柳が生えていた。この草原は野営する一行が防御の背にするために選んだものであつた。馬車は正面のなだらかな上り坂になっているところの、オークとヒッコリーの木の気持ちのいい陰の下に移動させたが、その木々の間に松の木が何本かお互い離れるようにしてぼつんとぞびえ立っていた。そこへ馬は連れていかれ、ジェイムズ・グレイリングは火を起こす準備に取り掛かつた。彼の斧を探したが不思議なことに見当たらず、三十分探したものの無駄に終わり、彼らは昨夜寝た場所に忘れてきたのだという結論に達した。これはとんでもない大失敗であり、この損失をいかにして償うか彼らが思案していると、一人の黒人の少年が姿を現し、牛の小さな群を追いつながら彼らのすぐ足下の道を通りかかつた。この少年から彼らは斧を借りることができかもしれない農場から一マイルか二マイルしか離れていないことを知つた。そこでジェイムズは馬に飛び乗り、斧を手に入れることができるかもしれないと思いつながら馬を走らせた。いとも簡単に家を探し当て、宿屋の主人でもあつた農夫から斧を手に入れると、彼はスベンサー少佐が前の晩そこに泊まつたかどうかさりげなく尋ねた。泊まつていないという返事に彼は幾分驚いてしまった。

「昨夜わしのところに泊まつた男が一人おつたが」と農夫は言つた、「しかし男は自分を少佐とは言つてはおらんかつたし、そんな風にも見えなかつた」

「立派な栗毛の馬に乗つていなかったですか、高くて明るい色をした、前足が白い馬に」ジェイムズは尋ねた。

「いいや、違うな。男が乗つていたのはそりゃひどく黒い、真つ黒な馬で、白いところなどどこにもなか

った」

「そいつはあのスコットランド野郎だ。しかし少佐はどうしてあんなところに泊まらなかったんだろう。先へ進んで行ったにちがいない。この辺りには、南の方角には別の家はありませんか」

「そんなものはないな。上流の方も下流の方も、十五マイルほど行つたつて家は一軒もありやせん。この道路沿いのその範圍内に住んでいるのはこのわけだけじゃ。あんなの友人が南に進んだこともありえんな。もしそうだとしたらわしが見かけたはずじゃ。わしはあんなの目の前に広がるあの野原に出て一日中藪を払つておつたからの」

3

このときは特に気にかけることはなかったが、少佐が進路からそれたことを少し不審に思いながら、ジエイムズ・グレイリングは借りた斧を拾い上げ野営地に急いで戻つた。迫る宵闇の急務に應じるため焚き火用の木を余分に切るという労苦に身も心も掛かり切りになり、少佐に絡む何やら異様な状況についてじつくり考えることはできなかった。しかし自分がつけた火で調理された夕食を取ろうとして腰を下ろすと、想念がどつと彼の頭に押し寄せ、何かわからないが何かが起ころうとしているという思いと、これに反する思いが交錯した。彼の推測と懸念は全く中味のないものではなかったものの漠然としていた。奇妙な胸のむかつきと意気阻喪を感じたが、これは滅多にあることではなかった。つまり、空に雲一つなくそよ風には芳香と音楽の二つが、この二つだけが満ち満ちているのに虫の知らせという形を取って危険に目を凝らす、あの意気消沈とあの漠然とした精神の不安を若者は覚えたのである。彼のふさぎ込んだ様子は旅仲間から全く賛同を得ることはなかった。

ジョエル・スパークマンはこれまでになく上機嫌であつたし、若者の母も陽気に楽しそうにしており、物思ひに耽つてゐる少年が見張りのために森に入つていくとき彼女はその地方の短い簡単な歌の小さな一節をいつも突然歌ひ出す始末であつた。先の戦争の暗い事件のためにこの歌が彼女の記憶から完全に消されることはなかったのである。

「これは絶対におかしいぞ」先ほど私が読者の皆さんにざつと説明した密集した草原、つまり低湿地の縁をぶらぶら歩きながら若者は独り言を言つた、「俺をこんなに悩ますものが何なのか氣になつてしょうがない。心配で物恐ろしいのに怖がる必要がないこともわかつてゐるし、森に俺を不安がらせるものは何一つ見当たらない。少佐がこの道を通らなかつたのは確かに妙だ。多分ことは別の開拓地の側を通る北側の道を進んだのかも知れない。あの家の人にそんな道が他にあるのか訊いておけばよかつたな。しかし絶対あるはずだ、それでなければ一体少佐はどこへ行つたと言うのか」

思索を重ねるタイプではないジェイムズ・グレイリングがいくら思索しても出発点からそれほど先へ進むことはなく、彼は独り言を断続的に繰り返しながら湿原の縁を横切り始め、ついには街道との合流地点であり湿原が終わるところまでやつて来た。若者はそこに向かつて入つて行き、意識しないまますぐに道路を離れると、まもなく湿原の藪の反対側に立つてゐた。彼自身が語つたところによると、さらに彷徨うように歩いていく彼から自制する力はすっかり失われていた。どこまで歩いて行つたのか自分でもわからなかつたが、二時間だけ巡回する予定が、それどころか彼は四時間以上も野営地に戻らなかつたのである。やがて突然どつと押し寄せた疲労感に若者は木の下に座り込み、暫く休息を取つた。このとき寝入つてはいないと断言できると彼は言つた。その晩眠りが自分の臉を襲つたことは決してないこと、疲労困憊は覚えたけれども眠氣は感じなかつたと、そしてこの疲労感とは体を麻痺させ、彼を苦しめ、彼を眠らせない効果を發揮したと主張し、この主張を彼

は生涯押し通した。こうして若者がぐつたりと木の下に座り込みながらも、頭の方は訳もなく激しく興奮し期待と注意力が最大限研ぎ澄まされた状態にあったとき、友人スペンサー少佐のあのよく聞き慣れた声が自分の名を呼ぶのが聞こえた。答える力を奮い起こすこともできないうちに、その声は「ジェイムズ・グレイリング・ジェイムズ！ジェイムズ・グレイリング！」と三回若者に呼びかけた。彼に欠けていたのは勇氣ではなかった、このことだけは彼ははつきり自信があつた。というのも、どうもおかしなことが起きていると確信した彼は、もし体を自在に操ることが出来ておれば戦う覚悟でいたし、その断固たる思いは生涯最大のものであつたと彼は後に語っている。しかし喉は息が詰まるほどにからからに乾き、唇はさながら蠟でしっかりと封をされた感じであつた。ようやく返事ができたとき、その声は今生まれたばかりの子供のささやき声のように細く弱々しい声であつた。

「ああ、少佐、あなたでしたか」

若者の記憶では、これが彼が答えるのに使った言葉であつた。声は湿原の少し離れたところから聞こえ、若者自身の声は耳に入らなかつたが、間髪を容れず答えが返つてきた。彼が今でも覚えているのはそのとき彼が言おうとしたことだけであつた。返事は次のような趣旨のものだった。

「そうだ、ジェイムズ、君に今話しかけているのは、君の友人ライオネル・スペンサーだ。私の姿を目にして驚かないでほしい。この私は惨殺されたのだ」

ジェイムズの主張によれば、怯えたりはしないと相手に言おうとしたのだが、彼の声はまだか細い声のままであり、自分の声はほとんど聞こえなかつたという。彼が答えるとすぐに、足元の湿原の灌木の茂みの中を突然そよ風らしきものがさらさらと音を立てて吹いてくるのを彼は耳にし、我とはなしに、いやそのつもりは毛頭ないのに目を閉じた。目を開けると二十歩ほど離れた湿原の縁にスペンサー少佐が立っているのが見えた。

藪の陰に少佐は立っており、空には星の明かりしかなかったが、それでも友人の顔の造作の一つ一つをはつきりと見て取ることは何でもないことであつた。

友人の顔は非常に青ざめ、服は血にまみれていた。ジェイムズは自分が座つていたところから懸命に立ち上がつて相手に近づこうとしたと後で語つた。「なにしろ、俺の心には」と若者は言つた、「實際恐怖感どころか激しい怒り以外何もなかったのさ。しかし俺は手足一本動かせなかった。俺の両足は地面にくっついて離れず、手は脇腹にくっついたままで、ただ体を前方へ曲げて喘ぐばかりだつた。立ち上がることもできず苛立ちのために死んでしまうのではないかといった感じだつた。しかしあらがうことのできないある力が俺を動けなくし、俺はほとんど口もきけなくなつてしまつていた。俺が口にできたのは『殺害されたですつて！』という言葉だけだつた。俺はこの言葉を十数回も繰り返したに違いないと今でも信じている」

『『そうだ、殺害されたのだ。一昨夜君の焚き火のところに泊まつたあのスコットランド人に殺されたのだ。ジェイムズ、あの殺人者を法によつて裁いてくれ。ジェイムズ、聞こえるか、ジェイムズ？』

「これが」とジェイムズは語つた、「これこそ俺が耳にした言葉だつた、いやほこれに近い言葉だつた。俺は少佐に事のいきさつを話すよう頼もうとしたし、また少佐が俺にやつてほしいことをどうやって果たせばいいのか尋ねようとしたが、少佐は話しているように思えても俺の声は俺には聞こえなかつた。というのも、俺が話したいことを話そうとすると、ほとんど間髪を容れずに少佐は俺が實際口にしたかのように俺の質問に答えたからだ。少佐はこの湿原でスコットランド人が彼を待ち伏せ、彼を殺害し、彼の死体を隠したのだと言つた。その殺人犯はチャールストンに向かつたとも、また、もし俺が急いで町に向かえば、港に停泊している、英国へ向けて出航する準備の整つているファルマス行き定期船に乗り込んだ殺人犯を見つけることができるとも少佐は言つた。それからまた、すべてが俺が町に急いで向かうことにかかつていること、遅れず船に乗り

込み犯人を殺人罪で告訴したければ明日の夜までに町に着く必要があるということを付け加えた。『怖がつてはならんぞ』と話を終えた少佐は言った、『ジェイムズ、何も恐れてはならんぞ。神が最後まで君を助け君の支えになって下さるからな』話を聞き終えたとき、突然涙が目にとつと溢れてしやうがなかったが、それから力が湧いてくるのを感じた。話すことも戦うこともほとんど何でもできると思った。俺は飛び上がるようにして立ち上がると少佐が立っているところへ駆け寄ろうとしたが、ところが最初の一步を踏み出したときには少佐の姿はなかった。俺は立ち止まって辺りを見回したが何も見えなかった。湿原は真つ暗闇の中にあつた。しかし俺はそこへ下りて行つて、少佐が立っていた辺りへ突き進もうとしたが、藪や湿原の灌木が密集し生い茂つていて、遠くまで行くことはできなかった。このときには俺も何とか大胆に力強く立ち向かうことができるようになっていたから、半マイルは届くぐらいの大きな声で少佐の名を叫んだ。何のため声を上げたのか、何を知りたかつたのかそのときははっきりわからなかった、いや忘れてしまっただけなのかもしれない。しかしそれ以上何も聞こえてはこなかった。この時俺の心には野営地のことが浮かび、母と叔父の身に何かが起きているかもしれないという恐怖を覚え始めた。というのも、このとき俺はそれまで考えもしなかったことを、つまり湿原を迂回するようにして遠くまでやつて来た俺は、二人が突然襲われても、二人を助けることも助勢に駆けつけることもできない状況にあることをひしひしと感じたからだ。それに二人のところを離れて何時間経っているのか考えることもできなかった。しかし、夜もかなり更けているように思えた。星はいつになくきさらけと輝き、朝空けのまばらな白い雲がわき上がってきて西の方へ駆けて行こうとしていた。で俺は取るべき進路について思案した。というのも、頭は少し混乱していたし、今自分がどこにいるのかよくわからなかったからだ。しかし少し考えてから同じ道を引き返すと、まもなく野営地の火が見えてきたが、火はほとんど燃え尽きていた。それで俺は二時間巡回するつもりがそれよりもかなり長い時間野営地を離れていたことがわかつ

た。野營地に戻ると、馬車の下を覗いてみたが叔父はぐっすり寝入っていた。先ほど自分の耳で聞いたことや自分の目で見た光景に胸はほとんど張り裂けんばかりであつたけれども、叔父を起こすつもりはなかった。火をかき回し元通りに勢いづかせると、警戒を緩めず明け方近くまで待った。夜が明けると母は俺の方に馬車から声をかけ、誰なのと尋ねた。これに叔父も目を覚まし、それで俺はその晩起きたことをすぐに話し始めた。これ以上胸の内に秘めておくなんてことはとてもできなかった。母はそれはとても奇妙な話ねと言ったが、叔父のスパークマンは俺はただ夢を見ていただけだと考えた。でも叔父は俺を説き伏せることはできなかった。それで俺が少佐に言われた通り夜明けに出発してチャールストンまで全速力で馬を飛ばすつもりだと叔父に言う、叔父は笑つて馬鹿なことをするもんだと言った。でも俺は頭はしっかりしていると思つていたし、夢を見たのではないというはつきりとした確信があつた。母も叔父も俺の出発を延期させようと躍起になつたが、俺の決意は固まつていたから、二人は諦めざるをえなかった。だつてそうだろう、少佐が俺に話してくれたのに、後に残つて馬車のペースで進んで殺人犯をただ見送ることになつたら少佐に対して俺は大の親友ではなかつたことになる。もしそんなことをやつたら二度と白人の顔をまともに見ることはできなかっただろうと思つた。夜が明けるとすぐに俺は馬に跨つた。母はひどく悲しんで、行かないでくれと懇願したが、叔父のスパークマンはひどく不機嫌な顔をして俺を分からず屋のとなかんちきと呼び続けたから、最後には相手が親戚であることを忘れるぐらいに腹を立てるところだつた。しかし叔父がどんなに口をすっぱくして言つても俺を止めることはできなかったから、叔父たちが出発するために一連の馬を引き綱に繋ぐ前に、俺はもう五マイルも先に進んでいたと思う。老いばれ馬を傷つけないようにできる限り馬を飛ばした。行く手にはまだ四十マイル以上かなりの旅が残つていたし、それに道は粘土質で走りづらかつた。しかし町に入つたときは日没から二時間はたつぷり経っており、俺は人を見つけるとすぐに船はどこに停泊しているかと切り出した。埠頭に着き尋ねる

と、ファルマス行き定期船がどれか教えてくれた。船は川に停泊していて風向きがよくなればすぐにでも出航できる状態だった」

4

これまでジェイムズ・グレイリング自身の口から彼のもどかしい気持ちを語ってもらったのだが、同じようによきもきしながら彼は英国の定期船に乗船するためにボートを一艘借りたところで、法的手段や自分の目的を適切に達成するためのその他諸々の手段に訴えることを忘れていることを思い出した。彼は法律上の手続きについてそれほど詳しくなかったものの、この問題について思案し始めたときすぐにそのような手続きが必要であることに気づくだけの常識は持ち合わせていた。この確信は別の困難な課題を彼に突きつけた。彼はどの筋に助言と助力を仰げばいいのかわからなかった。しかしそのとき若者の困惑ぶりを目にし若者の訛りと服装から彼が田舎の出であることを見抜いた船頭が助け船を出してくれ、ジェイムズはどこに行けば叔父のスパークマンが以前取引をしていた商人と会うことができるかいろいろと教えてもらった。商人たちのところへ行き、亡霊が現れた話を遠回しの言い方は使わず残らず語って聞かせた。紳士連はすぐにジェイムズ・グレイリングの話を夢だと推測したのだが、しかし夢にしては鮮明かつ好奇心をそそるものであって、この事件に若者が激しく興奮し一意専心事に当たっている様を見ると、彼がやろうとしている船の搜索をやってみても少なくとも不都合は起こるまいと判断した。ジェイムズを誠実な青年だと信じる彼らは、スコットランド人が乗船しているのを万一看つけることになればそれは奇妙な暗合かもしれないと考えたのである。ここで商人の一人が若者の話を別な形で試す提案を持ち出した。チャールストンで名の通ったスペンサー少佐には何人かの業務代理人

がおり、たまたま商会から数ロット²⁶しか離れていないところに事務所を構えており、そこへ一行はすぐに向かうことになった。だがここでジェイムズの話は幾分不利に働く事実と出くわしたのである。代理人たちはスベンサー少佐からの手紙を取り出して見せたが、そこには一ヶ月間は町に来る可能性が全くないことをそれとなく知らせる内容が書いてあり、外国船がチャールストンに到着したことや出航の予定の時間を代理人から通知していただいたが残念ながら今回その外国船に乗船する機会を利用できそうにないとの旨のことが書きつづつてあった。代理人たちはこの手紙をジェイムズと仲間の商人たちに向かって読み上げ、ジェイムズが真顔で自分の目で見た幻の詳細を語り力説するのを見て笑いたい気持ちをかろうじて抑えた。

「気が変わったんだ」血気に逸る若者は答えた、「少佐はこつちへ向かつていたんだ、本当だ。俺たちと一緒に野営したとき百マイルも旅をしてきていたんだ。少佐のことはよく知っている。嘘じゃない、俺はほとんど夜通し少佐と話し込んだんだからな」

「少なくとも」ジェイムズと一緒にやってきた紳士たちは言った、「この事件を調べても困ったことにはならんだろう。このマクナブという男をあの手で探す令状はすぐ手に入る。もし男があの手で定期船に乗っているとこを見つけることができれば、スベンサー少佐の消息を俺たちが確認できるまで治安判事は男を拘留するところが当然できるはずだ」

このような形で事に当たることになり、彼らが令状を手にし今回の任務に適した法の執行者が見つかったのは日没も近くになってからのことであった。このように準備に暇取り、ジェイムズ・グレイリングのようにただひたすら先を急ぎたい者がどれだけ苛立たしい気持ちになったかは想像に難くない。ボートに乗り込み犯人がいるはずの定期船に向かうとき、彼の血は激しく興奮し、じつと座らせておくのも容易ではなかった。勢い込むあまりボートは何度も転覆しそうになった。ただ好奇心のためにこの事件に興味を持ち一緒についてきた

商人の一人は、ジェイムズが船との間の距離を狭めようと躍起になり海に飛び込むのではないかと絶えず心配していた。以前船に乗ったことなどない若者であったが、ボートが近づきロープが投げられたときこれをひつつかんで猫のように敏捷に舷側をよじ登ることができたのはこのもどかしい逸る気持ちのお陰であった。名前や目的を告げるのももどかしく、すぐに甲板の一方から他方へ走ると士官や乗客や船員の顔をじっと覗き込んで相手をもう少しで怒らせるような視線でみつめたが、これには一同驚いてしまった。若者は落胆の色を見せて搜索をやめた。船の中には容疑者の顔に似た顔は一つもなかったのである。このときには彼の友人の商人たちも保安官の部下と一緒に船に乗り込んでおり、船長と話を交わしていた。グレイリングが近づくと、令状に記載されているマクナブという名前の男は乗客にも船員にもいないとちょうど船長が断言しているところであった。

「ここにいるんだ。いるはずだ」せっかちな若者は叫んだ。「少佐は生前嘘をついたことはなかったし、亡くなつてからも嘘をつくことはない。マクナブはここにいる、あいつはスコットランド人で・・・」

船長がここで若者を遮った、

「お若い、この船には何人かスコットランド人が乗っておるが、確かその一人はマクラウド²⁷と言い・・・」

「俺に会わせてくれ、それはどいつだ」若者は高飛車に訊いた。

この頃には乗客とかなりの船員がこの小さな集団の周りに集まっていた。船長は彼らに目を向けると尋ねた、

「マクラウドさんはどこだ？」

「船室に下りて行きました。具合が悪いのです」乗客の一人が答えた。

「そいつだ！そいつが例の男に間違いない！」若者は叫んだ。「命にかけて誓うぞ、そいつこそマクナブだ。」

偽名を使っているだけだ」

このとき乗客の一人が、少し前にマクラウドが気分がすぐれないと言って、ボートが急速に船に近づいて来つつあったとき船室に下りて行ったことを思い出し、皆にこれを話した。これを聞くと船長は一団の先頭に立って船室へ下りていき、ジェイムズ・グレイリングと他の者たちは船長のすぐ後を追いかけた。

「マクラウドさん」船長はその人物の寝台に近寄りながらいささか高揚した声で言った、「少しの間で結構なので甲板に顔を見せていただきたい」

「船長、本当に気分がすぐれないのです」寝台のカーテンの後ろから弱々しい声が答えた。

「来ていただかないと困ります」と船長は答えた。「町当局が出した逃亡犯人の搜索令状があるんです」

マクラウドが再び体調を崩していると話し始めたとき、剛胆な気性の若者グレイリングは船長の前に突進し、容疑者の姿を隠しているカーテンをぐいと手で掴むとこれを剥ぎ取った。

「こいつだ！」若者は男を見るなり叫んだ、「こいつがスコットランド人のマクナブだ、スペンサー少佐を殺害した男だ！」

マクナブは——それは例の男であった——死人のように青ざめていた。アスペン²⁸の葉のように打ち震えていた。言語に絶する激しい不安に襲われた彼は目を大きく見開き、唇は完全に鉛色になっていた。それでもやつのことで話し始め、その罪状を否認すると言った。目の前にいる若者は全く知らないし、スペンサー少佐のことも知らない、自分の名はマクラウドで、他の名で自分を呼んだためしは一度もないと言った。すべて言いがかりだと主張したが、話し方は支離滅裂であった。

「マクラウドさん、さあ起きてください」と船長は言った、「あなたは不利な立場にある。保安官と一緒に来てください」

「私を敵に委ねるつもりか」刑事被告人は強い調子で尋ねた。「あんたは同国人ではないか。ブリトン人ではないか。私はわれらが主人英国王のためにこいつら反乱者とこれまで戦ってきた。そのせいで連中は私の命を狙っているのだ。私を連中の血にまみれた手に引き渡さないでくれ」

「この嘘つき野郎！」とジェイムズ・グレイリングは叫んだ、「お前は俺たちの野営地の焚き火のところで俺たちの側についたと言ったじゃないか。ゲイツの敗北の場に、それからナインティ・シックスにおったしやべったじゃないか」

「しかし俺は」スコットランド人はやにやしながら言った、「どっちの側について戦ったか言っていないぞ」
「ほう、これは大変なことになったぞ」と保安官の部下は言った。「ほんの少し前にはこの若者を全く知らんと言ったのに、今度は若者に会ったことがあつて一緒に野営したと白状しとるわい」

スコットランド人は不注意から自分に不利なしつかりとした論拠を相手に与えてしまったことに呆然としていた。しどろもどろに矛盾した言い訳を試みたが、ますます苦境の網に自分を絡ませるだけであつた。それでも彼は、同国人として、同じ君主の臣下として、自分たちに今も憎しみを抱き殺そうと企んでいる敵から自分を保護してくれるよう、この船の船長と乗り合わせた乗客たちにしきりに訴えた。彼は自分がトリーとして反乱軍の主義主張に甚大な危害を加えたことを自慢してみせ、彼らの愛国主義を刺激しこれを利用しようとした。そして今回の殺人事件はこの青年の口実にすぎず、戦争中自分が行つた残忍な行為が恨みを買つたのは当然でその俺を捕まえその恨みを晴らすつもりだと主張して譲らなかつた。乗客の中には男に同調し告訴人たちを追ひ出してすぐに出航するよう船長に懇願する者も一人か二人あつたが、船の指揮を執る恰幅のいい英国人は直ちにこの卑劣な忠告をはねつけた。おまけに彼はそのような向こう見ずなやり方をすれば必ず危険が伴うということを他の者たちより心得ていたのである。サリヴァン島のモウルトリー砦²⁹は既に改修されており敵

への備えは万全であった。このとき船は鹵を剥き出しにしている大砲の身の毛のよだつ射程内に停泊していたのであり、少しでも動けばピンクニー城³⁰の顎から砲弾をまともに受けたはずであった。

「それはなりませんぞ、皆さん」と彼は言った、「この私を見損なつては困る。たとえ私と同じ教区の出身であつても、殺人犯をかくまうなんてことはこの私は断じてやりませんぞ」

「しかし俺は殺人犯じゃない」とスコットランド人は言った。

「だがあんたの顔がはつきり証明しとる」船長の答えが返つてきた。「保安官、被告人を甲板に連れて行きなさい」

この卑劣な男は英国人の足元にどつとひれ伏し、その膝にすがり泣きついた。英国人は男を振り払うと顔を見るのも疎ましいといった感じで顔を背けた。

「船室係」と彼は叫んだ、「この男の荷物を上に持つていけ」

船長の命令は実行に移された。荷物は船室から甲板に運び出され、保安官の部下に引き渡されると、衆人環視の中で検査され、中身一つ一つが調べられた。男の手荷物は小さな新しいトランクだけで、後で明らかになったことだが、チャールストンに着いてすぐに買い求めたものであった。これには二三着の着替えの服、二十六ギニの現金、壊れたままの金時計、それにジョエル・スパークマンの野営地の焚き火のところで彼が見せた二丁のピストルが入っていたが、一丁の銃は握るところのちょうど上の銃床が折れて短くなり台尻は完全になくなっており、これは前見かけたときと違っていた。台尻は男の持ち物の中には発見されなかった。トランクの中の品を注意深く調べても男の有罪の嫌疑を立証しうるようなものは何一つ見つからなかったが、男がまず間違ひなく有罪であることを確信していない者はそこには一人もなく、あたかも陪審員が既にはつきり事実認定したかのようであった。その夜男が眠つたのは、もし眠れたとしての話だが、町の牢獄であつた。

男を告発した若者、興奮し断固とした決意を固めたジェイムズ・グレイリングは、しかし、眠れなかった。勇猛果敢な若い指揮官の悲運に対する悲しみやら、骨の折れる厄介な仕事を大成功でやり遂げたという意識に高貴な精神を持つ者が当然抱く歓喜の喜びやら、矛盾した感情が入り乱れて若者を興奮させ、この二つが相まって彼の目から心地よいまどろみをすべて追い払ってしまったのである。夜明けと共に再び起き出したものの、頭はまだ前日自分が関わった大事件のことでいっぱいであった。若者が町の普通の通りを歩き回った足取りをここで逐一辿るつもりはないし、また、その後の数日間積極的に動き、開廷のためのおきまりの手順を早める状況を弁護士のように調べ上げ、その結果この若い告発人が極度の興奮を新たに覚えたことを説明するつもりもない。マクナブ、もしくはマクラウド——恐らく両方とも偽名であったと思われる——は、最初の恐怖から立ち直るとすぐに弁護士の助けを求めた。罪人であろうが聖人であろうが、とにかく客が金さえ気前よく出せば変わらぬ熱意でもって仕事に精出すのを厭わない、およそいかなる社会にも見受けられる、抜け目のない卑劣で風見鶏の弁護士の輩の一人であった。刑事被告人は人身保護令状のもとに出廷を命じられ、釈放のための意見陳述が弁護人から何度かなされた。被害者とされるスペンサー少佐が本当に死んでいるのかどうか、これを確認することが国がなすべき第一義務の一つとして必要となった。犯罪のために収監され審理され処罰されるべきだということが立証されるまでは、まずは犯罪が行われたことを明らかにする必要がある、弁護士は若いグレイリングの亡霊物語を笑い飛ばし嘲った。老判事は先祖の信仰と見解にそれなりの尊敬の念を払う高潔な人間の一人であり、提示された証言のもとではマクラウドを絞首刑に処することは確かにやりたくなかったものの、これまでの状況証拠の中にマクラウドの現在の拘留を正当化するだけのものを十分に見ていた。一方、

スペンサー少佐の行方を捜し出すべく八方手を尽くす必要があった。ただ、たとえ少佐の行方がわからないままであったとしても命を落としたと決めてかかることはできないであろうと、マクラウドの弁護士は強く主張した。これに対して判事はげげんな顔つきで首を横に振った。「天地神明に誓って言わせてもらうが」と彼は言った、「必ずそうなると思ひ込んでもらつては困る」判事はアイルランド人であり、いかにもその国の者らしく話を続けた。であるからして読者の方々は彼のアイルランド式の滑稽な訳のわからない話を我慢していただけだと思う。「別な人間を殺害した廉で縛り首にすることは、たとえその殺害された人間が死んでいなくても、許されるんじゃ。そうじゃ、天地神明に誓って言うておくが、たとえ相手が實際は怪我一つ負つていなくとも、殺害者が血なまぐさい行為のために縛り首にされぶら下つてゐることもあるんじゃ」

お断りしておかなくてはならないが、この判事は實在の人物で、若い頃は南部で極めて高い名声を得た人物であり、ここで論拠と立論によつて自分の意見の正しさを証明することに取り掛かったのだが、そのすべてに裁判所所属の弁護士連が歓喜したのは明らかであつた。しかし今この段階でその論拠を提示することは話の進展をただ妨害することに繋がるだけだ。しかしながら、ジェイムズ・グレイリングは真相を掴むのに必要とされた気の長いやり方をただじつと待つことに納得が行かなかつた。判事の英知も彼には効き目がなかつたが、恐らくそれはそれが理解したいという単純な理由によるものであつたのかもしれない。だが容疑者の弁護士の嘲りは骨の髄まで若者を傷つけ、彼は一度ならず「あの生意気な奴の化けの皮を剥いでやる」という覚悟を密かに呟いた。しかし若者の決意はこれだけではなかつた。彼がすぐに実行に移したことがひとつあり、それは殺害された友人の死体が発見できると考えた場所ですぐそれを探すということ、つまり、あの亡霊が彼の目に姿を見せた例の暗闇に包まれた陰気な場所を探すということであつた。

母と叔父のスパークマンにこの計画を話すと——自分の決意に拍車をかけるためではなかつた——二人とも

賛成してくれた。叔父は自分も一緒に行く決めて、さらには凶悪犯罪の容疑者を逮捕した保安官の部下もお供することになった。判事の前で尋問が行われマクラウドが再拘留された日の翌朝、夜が明ける前にジェイムズ・グレイリングはその旅に出た。遅れが度重なるにつれて若者の熱烈な意気込みはさらに力を増し、懸命に馬に拍車を当てた彼は正午を回った頃には探索を行うべき場所の近くまでやって来た。二人の連れと彼がその場所に近づいたとき、まずどちらの方角に進めばいいものか彼らは皆途方に暮れた。湿原は雑木林が寄り集まってできたもので、棘のある植物や蔦や密集した人を通さぬ灌木が壁となつて人間が入るのを拒んでいるようであつた。都会育ちの男の目にはこの湿原は近づきたいものに見え、だから中に入つて行くのは絶対に無理だとはつきり言つた。しかしジェイムズの意気が阻喪することはなかつた。意外な新事実が明らかにされたあの晩の自分の足取りをしつかりと辿りながら、彼は湿原を迂回するようにして二人を案内した。摩訶不思議な茫然自失——ジェイムズ自身がそのように考えた——が彼の身にふりかかったとき彼がその足元に座り込んだ木を二人に見せた。それからその木から二十歩ほど離れた亡霊が姿を見せた場所を指差した。三人は一緒にその場所に向かい中に入ろうとした途端に出端を挫かれた格好になり、二人だけでなくジェイムズまでも、殺人犯と被害者がそのようなところへ入つて行けたはずがないと思ひ込んでしまった。

ところがここで実に不思議なことが起こつた。三人がちよつと目を向けたときそのように見えたのである。どちらの方角へ進んでいいやら決めかねて三人が当惑したためらつて立ちつくしていると、彼らが必要に入ろうとした場所から少し北のちようど湿原の中央から突然鳥の群が羽ばたく音が聞こえてきた。見上げると五十羽ほどのノスリが、南部で悪名高いあの人慣れた禿鷲が、湿原の奥の方から上に飛び立ち湿原を覆うように立っている高い木の枝に何羽か一緒になつてとまるのが見えた。たとえこの鳥の性質がどんなものか知らなかつたとしても、鳥の群がこれまで取り掛かつていた特別な用向きが何であつたかは、何羽かの鳥が巨大な肉の塊を

口にくわえたまま飛び上がり、つまり木の枝の上をよろよろと歩きながら嘴で引きちぎっていることから明らかになった。この光景を目の当たりにしたジェイムズ・グレイリングは耳をつんざくような金切り声を上げ、この不快な鳥の群を脅してついばむのをやめさせようと必死であった。

「かわいそうに少佐、かわいそうに」若者の口から思わず出た苦悩の叫び声であった、「まさかこのようなことになるうとは思いませんでした」

このようにして糸口と刺激を与えられた探索は新たな努力と勢いを得て押し進められた。そしてついに、茂みの中にできた隙間が見つかり、ほんの数日前にかなり大きな体の持ち主がそこを通り抜けたことは明らかであった。小さな灌木の枝が折れ、下生えは踏みつけられ地面に埋まっていた。この小道を辿って進むと、この類の荒地地によくあるように、一歩進むたびに草木の茂みは目立って少なくなり、最後には小さな池に出た。面積は狭く落羽松だらけの池であるが、それでもかなり深い池であることが判明した。実はそこは鰐の巣穴であり、この爬虫類の大部族が居を構えていることはまず間違いなかった。池の縁で彼らが発見したのは、目の鋭い禿鷲たちが引き寄せられご相伴にあずかった馬の死体であり、ジェイムズ・グレイリングはすぐにこれがスペンサー少佐の馬であると断定した。動物の死体はずたずたに引き裂かれていた。目はくり抜かれ腸は完全にえぐり取られていた。しかしよく調べてみると、どのようにして馬が殺されたかを知るのは難しいことではなかった。死の原因は小火器であった。二発の銃弾がちょうど頭の目の上のところを貫通しており、そのうちのひとつが致命傷となったに違いなかった。殺人犯は馬をここへ連れてきて、死体が発見されたこの場所で残忍な犯行に及んだのだ。馬の持ち主の死体の搜索が次に行われたが、その努力は暫く実を結ばなかった。ジェイムズ・グレイリングの鋭い目が、枝を池の中へ突き出している倒木の側にある苔と緑色のスゲの山の中に、この土地のものとは思われない白っぽく見えるが変色した物体をようやく見つけた。若者はその倒木を跨いで

その物体のところまで行くと悲しみの声を突然上げ、遠くにいる二人の連れに彼の不運な友人の手と腕を見つけたと告げた。最初彼の目にはつきりと見えたのは友人のシャツの袖口であった。これを掴むと木の枝の下に隠されていた死体を外へ引き出し、叔父の助けをもらいやつとのことと陸に引つ張り上げた。そこで死体を念入りに調べた。頭はひどい損傷を受け、頭蓋骨は主に背後から何度も何か固い道具で殴打され、数カ所が骨折していた。もつとよく調べてみると、腹部に銃弾による穴が一カ所見つかり、これが不運な紳士が受けた最初の傷であり、多分このために落馬したことはまず間違いないかった。極めて慎重に事を進めたように思われる殺人犯が「この上ともに大事をとる」³¹覚悟を決めたのでなければ、頭の殴打は必要なものであつたと思われるほどであつた。しかしこのとき、犯人の完全な有罪判決に資するものを何一つあやふやなものにはしないという神の摂理によるかのように、保安官助手はマクラウドのトランクで見つかった壊れたあのピストルの台尻につまづいたのである。これを拾つたのは死体が発見された池の縁で、ちょうどジェイムズ・グレイリングと叔父のスパークマンが死体を水から引き上げているときであつた。その破片が見つかった場所から、最後の殴打を加えた道具がそのピストルであることがすぐに判明した。「結局おまえは」これらの証拠が裁判の審理中に提出されたとき判事は言った、「恐らくやましいことなど全くやってはいない人間なのかもしれない、なにしろおまえがやる前に殺人犯が仰山おつたことはこの私がはつきり断言できるからな。それでもじゃ、これだけ有罪を決定づける確かな証拠を、いくら悪気がないとはいえ、犯罪の後に残すような人間がどうなるか、その模範としておまえを縛り首にしなくてはならんのじゃ。さて、陪審員の皆さん、マクラウドであれマクナブであれ、とにかくこの男がスペンサー少佐を殺害しなかつたのであれば、皆さんか私がやつたということになる。私たちの誰がやつたのか、さあ決めていただきますしよう。陪審員の皆さん、よろしいかな、もう一度繰り返しますぞ、この男を殺害した犯人はこの私と、あなた方と、被告席にいるあの男の中の誰かじゃ。私たちのうち

の誰が犯人かまだ迷っておられるのであれば、迷っておられる点をあの刑事被告人に有利に解釈しておくのが正義であつて慈悲でもあるわけじゃ。それでは評決に入ってくださいましよう。ただこれだけははっきり申し上げる。皆さんが被告人を無罪とされるようなことがありますたら、そこにおられる弁護士殿は私たち全員を殺人罪で裁判にかけるといふ賢明なる手段に出るでしょうな」

恐らく陪審員は老判事が示唆したもう一方の選択をそれなりに恐れ、陪審員を辞職せずに有罪の評決を提出したということをごで述べる必要はないだろう。マクナブことマクラウドは千七百八十某年の頃にチャールストンのホワイト・ポイント³²で絞首刑となつた。

「だからこれがだね」私の祖母は固く信じて言つた、「殺人が隠蔽されないよう、殺人犯が逃亡しないようになさる神の摂理の証なんだ。おまえにもわかつたと思うけど、犯罪の証拠を明らかにするため、犯人を見つけて出すために、神様が殺された人の霊を送つてくださったのだ。なんたつて他のやり方じゃ眞実は暴露されることはなかつただろうからね。あの亡霊が出なければマクナブはスコットランドに遁走していただろうし、あの可哀想な少佐が身につけていたお金を奪つたまま多分今頃も生きていただろうしね」

老婦人が亡霊の話を終えると私の父が話の穂を継いだのだが、ついでに申し添えておくと、これまで幾度となくこのような迷信話を小馬鹿にしている父に立ち向かうために祖母は今回この話を語つてきかせたかったのである。

「これで」と父は続けた、「この問題のお祖母さんの言い分はみんな聞いたわけだから、今度は俺がおまえに何を信じるべきかといったことについて教えてやろう。マクナブが今お祖母さんから聞いた通りのやり方でスペンサーを殺害したこと、ジェイムズ・グレイリングがこれを発見し告訴したこと、死体を見つけ重罪犯人を法に照らして処断したこと、マクナブが処刑され犯罪を白状したこと、ノースカロライナの州境で自分が所

属していたスコットランド系王党派の団を壊滅させた軍事行動においてスペンサーが特に勇猛果敢に戦ったことに敵意を抱いたばかりでなく、スペンサーが金を持つているとふんだこともあって、かような行動に及んだとマクナブが申し立てたこと、これらは確かに真実の話だろう。しかし亡霊の出現は抜け目ない正しい判断力に鋭敏な想像力が加わっただけの話だ。はつきり言えばジェイムズ・グレイリングは亡霊など見たのではなくて、自分の心の中にあつたものを見ただけのことだ。確かにこの事件は非常に注目を引く性格のものだし、奇妙な暗合と全く定かでない状況からなる事件だが、それでも自然で非常に単純な法則で説明がつくものだ」

老婦人は腹を立てた。

「それじゃ、殺人が行われ殺害された被害者の死体が発見されたところと同じ湿原の縁で亡霊が見えたのはどうしてだい？」

父はこの質問に直接答えず次のように続けた、

「おふくろ、ジェイムズ・グレイリングという若者は大いに気炎を揚げる、押っ取り刀の聡明な男だったのさ。血の気の多い競馬馬みたいな気性だった。度量が大きく、いつもてきばきと事を運び、後じさりすることのない青年だった。やるときは素早く思い切つて完全にやった。どんな厄介なことでも後込みすることは決してなかった。それどころか、困難や試練に絶えず遭遇するのを喜ぶ質の青年だった。男を意のままに操り虜にする気性の持ち主だった。自分の心を引きつけるものは何であれ心の奥底から強く激しく感じるタイプだったから、友人と別れた彼は、昔の親交と互いを遠く懸け隔てることになる二人の旅以外のことはほとんど何も考へることはできなかった。のろのろした馬車のスピードに合わせて進まねばならないため、彼はいらいらし、友人が出発した後は一日中不機嫌になった。次の日の暮方スペンサー少佐が前夜に泊まったはずの家に行き、スコットランド人のマクナブ以外誰も泊まらなかったことを知ったとき、彼がその状況に驚いたことはわかる。

『おかしい、一体少佐はどこへ行ったのだろう』と彼は心の中で呟く。それから彼の心がスコットランド人の性格、叔父が既に口にし彼自身も感じていた意見や疑いに向かうのは当然のことだ。マクナブがいくら異議申し立てをしたって、奴が今もトリー・黨員でありそれまでもずっとそうだったとみんなが完全に思い込んでいたのだからな。次にジェイムズの心が、街道が危険であること、当時の旅には至るところで危険がつきまとうこと、犯罪が多発していること、捨て鉢になった多くの人間に出会う可能性が高いことに戻っていくのは当たり前のことだ。野営地を守るために森に斥候に出るといふ彼がそのとき遂行していた職務はそのような思いを彼の心にもたらすのに詭え向きの仕事だったのさ。強欲を犯罪に駆り立てる富を持たない貧乏人たちでも旅には警戒が必要であると考えていたのであれば、スペンサー少佐のような裕福な紳士の場合もつと警戒する必要があったはずだ。ここでジェイムズは少佐と二人でスコットランド人が眠っていると思い込み野営地の焚き火のところで話を交わしたことを思い出した。実はスコットランド人はこの間ずっと眠らずにいたのではないか、それに、仮に眠らずにいたとするならば、自分が友人の裕福さについて話すのをスコットランド人が聞いていたに違いないと彼が考えるのは当たり前のことだ。勿論彼よりも拔かりなく大事を取った少佐は町へ向かうのに必要な金しか持ち合わせていないとはつきり言ったのだが、しかしこれにしたって、あの辺りの旅の危険性を知っている旅人なら金がないと明言するのは当然のことだ。マクナブが信用のおけない男だということは、最初見たときからジョエル・スパークマンと甥が受けた同じ印象だったからな。どう見ても、咎めを受けることがなければ強盗でも殺人でもやってのける男だった。夜の暗闇と静寂に包まれた湿原を巡回していた若者は、陰鬱な闇とすら悲しい帳を前にして、若い者や武術武道を幾らか知る者の心の中で等しくうごめくはずのことをあれこれと思案したのさ。その辺りは油断している敵を経験豊富なパルチザンが待ち伏せするのに格好の場所だと青年は思ったのだろう。藪が生い茂り人間の入って行けないところの三分の二の辺りを、街道がわずか

に緩やかな曲線を描きながら走っていた。待ち伏せの場所は相手から見えず、それでいて十歩離れたところで被害者の胸をしつかり狙うことができた。ジェイムズ・グレイリングの心が活発で賢明な判断に刺激されて、次第に筋の通った段階を経て次のような結論に辿りついたのはこれでわかるはずだ。スペンサー少佐が強盗を犯罪に誘う人間であること、その地方には強盗があまっていたこと、マクナブはその一人だということ、この場所こそ殺人行為をいとも容易にできいとも容易に隠せるところだということ、それに、これは全体に根拠と一貫性を与えた重要な事実だが、スペンサー少佐はかの有名な目的地に辿り着かず一方のマクナブはそこに到着しているということ、これらの結論に若者は達したのだ。

「このように互いに緊密に結ばれた想念を心に抱いたために、若者は警戒と巡回の区域の範囲を忘れ越えてしまう。この事実だけでも彼の想像力がいかに活発になつていたかを証明している。この問題についてさらに思案を重ねる彼はその想像力のためにも先へ進み、やがて体は疲れ果ててしまい、彼は一本の木の下にへたりこんでしまう。へたりこんで眠り込んでしまう。すると眠りの中でそれまではまことしやかな推測であつたものが歴とした事実に変化し、想像力の創造的特性が彼の空想に形と活力を与えることになる。大きな可能性から生じる力と適切な調和を取っているこれらの空想には、くつきりとした明白で鮮明な彩色がなされている。ちょうどこのとき若者は友人の姿を目にするのだ。しかし、スペンサーは自分が殺害されたこと、犯人はマクナブだということを若者に告げるが、どうやって、どういう風に、どんな武器で、ということについては触れていないことに誰でも気づくはずだ。これこそ若者が見たすべてのものが彼の想像力の産物であるということをはば納得のいく形で説明している。若者は青白い顔をした幽霊のような少佐を目にするが、どこを負傷しているのか見ていないし、それについて語ることもできない。彼は少佐の青白い顔の造作をはっきりと見ており、その服は血にまみれている。とすると、後に死体で発見された少佐を死体の格好をした亡霊として見た

とすると、彼の説明によれば少佐はほとんど人間の体とわからぬほどに殴打され泥にまみれていたわけで、その顔の造作を少佐のものだと認めることはできなかったはずだ。それに、服には血よりもむしろ泥と水がしたたっていたはずなんだ」

「困ったもんだね」と私の祖母の老婦人は叫んだ、「自分の目で見えないものをおまえに信じ込ませることは容易なことじゃないんだからね。おまえは聖書に出てくる聖トーマス³³そつくりだよ。でもスコットランド人がファルマス行きの定期船に乗っていたことをあの青年が知っていたことをどう説明するつもりかい。さあお答え」

「他のことと比べても簡単に説明がつくことさ。野営地でジェイムズとスペンサー少佐との間で交わされた話の中で、少佐がチャールストンの港に停泊中の、これからファルマスに向けて出航しようとしている定期船でヨーロッパに渡航するつもりだと若者に話したことをおふくろは忘れているよ。マクナブはそれを皆聞いていたんだ」

「おまえの言うとおりだ、ありそうなことだね」老婦人は言い返した、「だけどね、ファルマス行きの定期船でスペンサー少佐がヨーロッパへ行くつもりでいたとおまえは説明したけども、殺人犯もそのつもりだったという証明にはならないよ」

「しかしジェイムズ・グレイリングがそんな風に想像するのは十分ありそうなことだし当然のことだ。第一、彼はマクナブが英国人であることを知っていたし、トリーリー党員であると確信していた。連中はこの国で大変な汚名と公民権剥奪と民衆の騒動の犠牲になるという絶え間ない危険のもとで苦しんでいたから、そんな連中がこの国に長い間居残ることはほとんどないはずだと彼はすぐに推測したのさ。マクナブが本心を隠さざるを得ず、復讐心に燃えて戦った敵の主義主張を信奉しているように見せかけたという事実、自分が招いた危険

をいかに意識していたかを物語っている。それから、マクナブがスペンサー少佐と同じ程度にはつきりとファルマス行きの定期船がチャールストンに停泊して出て出航しようとしていることを知っていた可能性も十分ある。間違いなく彼は同じ目的で同じ旅を続けていたのであって、彼がスペンサーを殺害しなかったならば、二人ともヨーロッパに渡航する乗客仲間の一員となっていたはずだ。船の件を前もって知っていたかどうかは別として、眠っているように見えた彼の耳に多分スペンサーが話した船のことが入ってきたのかもしれない。そのとき理解していなかったと仮定しても、その町に到着したときそのことに気づいたということでも十分だ。不正に手に入れた強奪品をもってヨーロッパへ高飛びするというのは後から思いついたことで、犯人にとって周到な行動と思えたかもしれないものもすべて、彼を疑った人物の知性が生み出した推測だったと考えてまず間違いない。話の一部始終はたまたま証明された蓋然性の高いものの積み重ねの話であって、たとえ何かを証明するにしても、俺たちが知っていること、つまりジェイムズ・グレイリングが著しく賢明な判断力と鋭敏で大胆な想像力をもった男であったということを証明しているだけの話だ。ついでに言えば、このような性格の想像力は、抜け目ない常識と健全な全般的能力をしつかりと兼ね備えておれば、その機敏さと創造と結合の力のために天賦の才と呼んでいる独特の知性を作り出すのだ。亡霊を作り出すことができるのは天賦の才だけであって、ジェイムズ・グレイリングは天才だったのさ。いいか、彼が見た亡霊は彼自身が作り出した亡霊に他ならなかったのだ」

父の話は非常に退屈な感じがしたけれども、私は最後まで我慢に我慢を重ねて耳を傾けていた。父は私が持っていた一番の楽しみの源泉を破壊するために骨を惜しまなかった。私が亡霊の存在をそれから信じ続け、祖母の肩をもって父の哲学をはねつけたことは付け加える必要はないだろう。父の理解を図るより祖母を信じる方が簡単であった。

訳注

タイトルの副題「殺人は必ず露見する」はジェフリー・チョーサー『カンタベリー物語』から。

1 「バークレイの老婦人」―ロバート・サウジの「バークレイの老婦人」から。

2 エンダーの魔女―サムエルの死を悼んだサウルは魔術師を追放したが、その後ペリシテ人の攻撃に恐れをなし、エン・ドルの「口寄せのできる女」にサムエルの霊を呼び起こさせ、イスラエルの運命を聞いて地面に伏した。『サムエル記上』二八：四―二五。

3 ナインティ・シックス―チェロキー・インディアンのキオウイー村から九六マイル離れていた砦で、アメリカ独立革命のときの重要な前哨地点。

4 ビュフォードの虐殺―一七八〇年五月二九日英軍のバナスタ・タールトン陸軍中佐はエイブラハム・ビュフォード將軍指揮下のヴァージニアの大陸軍の降伏を拒絶して攻撃を続け、武器を放棄し助命を嘆願したアメリカ軍に対し虐殺を続けたため、三五〇名のアメリカ兵士の中三〇名ほどが捕虜、重傷、死を免れただけであった。負傷した兵士を何度も英軍が銃剣で突き刺したため、タールトンの残虐ぶりが有名となる。

5 ピケンズ―アンドリュース・ピケンズ（1739―1817）。北ジョージアのケトル・クリークの戦いではトー

リー・党員の大勢力を撃破。そのとき多くのトリー・党員の捕虜が国家反逆罪でナインティ・シックスで裁判を受け、五名が絞首刑に処せられた。

6 チェロキー族——一七八一年終わりにチェロキー族はジョージアとナインティ・シックスを攻撃、サウスカロライナとジョージアの三九四名の騎馬兵を連れた。ピケンス將軍はサウスカロライナと北東部のジョージアにあるオコネー郡の村々に報復攻撃を加え破壊、ピケンス旅団のロバート・アンダーソン將軍は一七八二年四月幾つかの部族が蜂起したとき決定的な打撃を加えた。一七八二年九月ナインティ・シックスの近くのチェロキー族が反乱を計画したとき、ピケンスは民兵を召集、ライフルとトマホークといういつもの武器に剣を使って攻撃した。

7 低地地方——サウスカロライナ州の海岸地帯のことで、当時「バックカントリー」「アップ・カントリー」と区別するために使用された名称だが、現在ではサウスカロライナ南部地域の一部（ボウフォート一带など）を指す。

8 ワサモ——未詳。

9 カウペンスの戦闘——サウスカロライナ州の北部、スパータンバーグの北にある地点で、ブロード川の南五マイルにある。ダニエル・モーガン將軍とタールトンとの間で戦闘が行われた。モーガン將軍の軍勢は九四〇から九七〇名、タールトンの軍勢は九七六から一〇五〇名でほとんどが正規軍から構成されていたが、ピケン

ズの民兵の攻撃に英軍正規軍はパニックになり逃走、英軍は四分の三の軍勢を失い、アメリカ軍の損失は一二名の死者と六〇名の負傷者だけであった。

10 タールトン―バナスタ・タールトン將軍 (1754―1833)。コーンウォリス指揮下の英軍の指揮官。大胆不敵な青年將校で、アメリカ軍への攻撃では冷酷さで有名となる。「ビュフォードの虐殺」「カウペンズの戦闘」の注を参照。

11 クロスクリークの開拓地―一七七六年二月五日ノースカロライナ州カンバーランド郡の高地スコットランド人のこの居住区で王党派の民兵の集会が開かれた。

12 ダンカン―未詳。

13 ゲイツ將軍―ホレイシヨ―・ゲイツ (1728?―1806)。サラトガの戦いで勝利を上げ、植民地の南軍の指揮を命じられるが、一七八〇年八月のキャムデンの戦闘で英軍に大敗。

14 ガム湿原―一七八〇年八月一日の早朝サンダース・クリークの近くで英米軍が衝突した。

15 サムター―トーマス・サムター大佐 (1734―1832)。ヴァージニア生まれ。一七六二年のチェロキー族との戦闘に参加後、サウスカロライナのユートウ・スプリングズに居を構え、治安判事となるが、一七八〇年英

軍にプランテーションを焼かれ、義勇兵を組織してパルチザンとして活躍。

16 マリオン―フランシス・マリオン将軍 (1732―1795)。ユグノーの子孫で、一七七六年のモウルトリ―砦の戦闘では少佐として参加、一七八〇年のチャールズタウン包囲まで第二連隊の指揮官。その後大陸軍の中佐として活躍。

17 ヴァージニ―「ヴァージニア」が訛ったもの。

18 キャンデン―サウスカロライナ州のほぼ中央にあり、ウオタリー川沿いのこの地点は一七八〇年―一七八一年は英軍の主要な駐屯地であった。

19 グリーン―ナサニエル・グリーン (1742―1786)。一七八〇年十二月疲弊した大陸軍の指揮を取る。

20 モーガン―ダニエル・モーガン (1736―1802)。カウペンズの戦闘でタールトン率いる英軍を撃破、英軍の精鋭部隊のひとつである第七一連隊を壊滅させる。

21 マクナブ―スコットランド系の姓で、一七一五年のジェイムズ二世派の蜂起のときロバート・マクナブはこれを支持しなかった。

22 ファルマスーイングランド南西部コーンウォール州の海港。

23 ホブカークー一七八一年四月二五日キャムデン郊外でグリーン率いる大陸軍とフランシス・ロードンが指揮する英軍が衝突した丘。

24 ユートウー一七八一年九月八日、サウスカロライナでの最後の大きな戦闘が行われたところ。

25 ツポラーソーペロウ（北米産ニッサ科のアメリカカヌまみずき）のこと。

26 ロッドー一ロッドは十六・五フィート。

27 マクラウドーカンバーランド郡で一七七六年の二月中旬に高地スコットランド人入植者の集会が行われ、クロスクリークでドナルド・マクラウドは致命傷を負った。

28 アスペンーヤマナラシ。微風でもカサカサ音を立てる。

29 サリヴァン島のモウルトリー砦ーチャールストンの東にある砦で、一七七六年六月英軍よる攻撃を受けたがこれを撃退、英軍の南部征服の最初の試みは頓挫する。

30 ピンクニイ城―チャールストン港を守っていた砦のひとつ。チャールストンから四分の三マイルほど離れたところにあった。

31 「この上ともに大事をとる」―マクベス四幕一場一八三から。

32 ホワイト・ポイント―現在のホワイト・ポイント・ガーデン。植民地時代白い砂浜に牡蠣の貝殻が多くあったことから。

33 聖トーマス―キリストの十二使徒のひとつで、疑い深いのでキリストの復活の証拠を要求した。『ヨハネによる福音書』二〇…二四―二九。